

論 考

特別支援学校のスポーツ活動充実に係る一考察

一般財団法人小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会
事務局長 鈴木 重 男
北海道立特別支援教育センター
教育課長 北 嶋 公 博

Ⅰ はじめに

特別支援学校は、障がい児の自己実現が可能となるよう、個々に応じた適切な教育課程の編成・実施を前提として設置されている学校である。

したがって、特別支援学校で指導されるスポーツ活動も、特別支援学校学習指導要領に基づくとともに、スポーツ基本法第2条第5項「スポーツは、障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない。」などを踏まえて、各学校で児童生徒の個々の状況等に応じて、創意工夫し、活発に指導展開するよう努めることが大事である。

本稿は、本道特別支援学校スポーツ活動の充実に寄与するため、このような特別支援学校のスポーツ活動の基本的な考え方を整理するとともに、筆者の特別支援学校でのスポーツ指導の実践等を整理・考察するものである。

Ⅱ 特別支援学校の児童生徒が参加するスポーツの整理(試案)

現在、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として、スポーツ基本法の理念等を具現するため、障がいのある児童生徒のスポーツ活動の在り方などに関心が向けられていることは好ましいことである。

スポーツは、他の競技者と競い合うことで感受される、勝つ喜び、負ける悔しさ、向上するための努力など、人間関係を広げ、深める社会性の育成への寄与や、児童生徒個々の自己叱咤による努力することで心身の強靱さの育成にも寄与する大切な教育活動である。

したがって、特別支援学校の児童生徒が参加することができるスポーツを数多く開発・工夫等することが、特別支援学校関係者には求められている。

ところで、特別支援学校の児童生徒が参加できるスポーツは、体育科等の授業で行うスポーツ、校内で開催されるスポーツを含めて、地域で開催されるスポーツや、より広範な市町村レベルや都道府県レベル、また国レベルのスポーツまで、多くのレベルのスポーツがある。

これら特別支援学校の児童生徒が参加することができるスポーツ・ゲームに参加する場合の「個別の配慮」と「障がいの種類・程度」のルール配慮により区分すると、次のようになる。

表1 障がい児のスポーツの区分(試案)

区分		障がい種別・程度等の規制	
		ある	ない
個別の配慮	ある	創意工夫型スポーツ ・車いすスティックホッケー ・ゴロ野球 ・特別支援学校と小・中学校の交流(フロアバレーボール等)	特別支援学校型スポーツ ・小野寺眞悟杯フットサル大会 ・北海道ハンディキャップスキー大会
	ない	パラリンピック型スポーツ ・パラリンピック ・デフリンピック ・スペシャル・オリンピックス	インクルーシブ型スポーツ ・少年団 ・中体連 ・高体連

1 創意工夫型スポーツ

特別支援学校学習指導要領は、障がいの状態や特性及び心身の発達の段階等、並びに学習の進度等を考慮して、基礎的・基本的な事項に重点を置き、個別の指導計画を作成して指導に当たることとされている。したがって、特別支援学校の教師は、児童生徒個々の障がいの状況等を、充分、把握・理解した上で、個々の児童生徒が持っている力を十分に発揮することができるよう、創意工夫することが求められる。

例えば、時間を競う100m走やスキーの滑降等は、時間を競うスポーツであるが、自己申告制による時間差の多少で勝敗を決定する場合や、バスケットボールで個々の状況でバックボードに当てた場合でも加算するなど、弾力的なルー

ルで同一スポーツを行うことができる。

また、筋ジストロフィーの児童生徒が在籍している病弱特別支援学校では、電動車いすで移動し、長いスティックを用いたホッケー型のスティックスポーツを独自に創意工夫している。このような道具・用具の創意工夫による新たなスポーツもこのカテゴリーに入れる。

2 特別支援学校型スポーツ

特別支援学校は、学校教育法において、障がい種別の枠を超えた学校として制度化され、設置者の特段の規定がない限り、多様な障がい種の児童生徒が在籍することになる。筆者が勤務する法人が主催する「小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会」は、通常のフットサルルールを適用しつつも、特別支援学校に在籍していることをルールとして開催している。つまり、男女の性別も含め、視覚障がい、聴覚障がい、知的障がい、肢体不自由等の生徒がこの大会の参加対象となっている。しかし、視覚に障がいのある生徒の場合などは、視覚保護の立場からゴーグルの使用を認めるなど、障害に応じた個々への配慮はできる限り行っている。

3 パラリンピック型スポーツ

パラリンピック（「視覚障がい」「肢体不自由」「一部、知的障がい」対象）、デフリンピック（「聴覚障がい」対象）、スペシャルオリンピックス（「知的障がい」対象）は、同じ障がい種別、同じ障がいの程度で区分した競技者同士が競い合う。例えばパラリンピック「リオ 2016」大会では、100m 走で、同一障がい種でも障がいの程度等別に男子 16 クラス、女子 14 クラスの決勝レースが行われ、全部で 30 人の金メダリストが誕生している¹⁾。

また、北海道においても、視覚障がい特別支援学校間、聴覚障がい特別支援学校間の児童生徒同士のスポーツが毎年開催されている。

4 インクルーシブ型スポーツ

通常、障がいの程度が軽い児童生徒は、多くの場合、中体連や高体連等のスポーツに出場し

ている。また例えば、「全日本小学生中学生アーチェリー選手権大会」は、特段、車いす使用児の参加もルールで認めている。

このように、特別支援学校に在籍する視覚障がい、聴覚障がい、知的障がい、肢体不自由、病弱の児童生徒が、地域の中で、地域の人々と共に同じスポーツに参加することができるのが、このインクルーシブ型スポーツの特長になる。

III 視覚障がい特別支援学校での指導実践例

筆者は、長年、北海道の視覚障がい特別支援学校に勤務し、視覚障がいのある児童生徒の教育に当たってきた。筆者には忘れることのできない貴重な体験がある。1970 年に北海道札幌盲学校に奉職した、翌年、1971 年、大阪市の日本ライトハウスで開催された視覚障がい児の手指動作等アセスメント研修会に参加する機会を得た。当該研修会は、約 1 ケ月間、派遣された。その日本ライトハウスに全く視覚を活用することができない日比野清氏（後日、同所視覚障害リハビリテーションセンター所長等歴任）が職業訓練を受けていた。同所では、職業訓練の一環として全盲者に普通卓球を指導していた。日比野氏は、筆者に普通卓球をしないかと言い、私には、ラバーの貼っていない卓球ラケットを使用するよう指示した。ここで、日比野氏が勝ち、私は普通卓球で視覚を活用できない日比野氏に負け、そのお陰で、筆者は視覚障がい児へのスポーツ指導には、そのとき、その場の状況を想起できるように、視覚情報を聴覚情報に置き換える工夫などあれば、スポーツが可能となることを体得できた。

1 「閉じた技能」と「開いた技能」

視覚障がい児にだけではなく、どのようなスポーツであっても基礎・基本的動作は、「閉じた技能」のつながりと、変化に応じて自分の体等を状況の変化に適合させる「開いた技能」が一体化した技能と言える。図示すると次のようになる。したがって、視覚障がい児には、スポーツの固有の技能を何度も何度も練習して、習熟して、少ない情報でも自動的に体が対応するま

でに高めるとともに、視覚情報を聴覚・触覚情報に的確に変えることができれば、視覚から得る情報が少なくても、多くのスポーツは可能になる。世界盲人百科事典²⁾は、「閉じた技能」と「開いた技能」(一部改変)を、次のように記している。

表2 「閉じた技能」と「開いた技能」の特性

閉じた技能 ○運動感覚的フィードバック、固定された環境内での身体及び諸感覚器官の使用を含むが、行動に必要とされたものの予測が極めて持ちやすいのが特徴 ○単調なものの反復によって、基本的技能又は習慣的技能を習得させていく ○環境からは独立している ○身体像の形成、自己を中心とした空間の評価、空間軸の形成、身体移動のための基本的習慣形成が主なテーマ 開いた技能 ○予測不可能な流動的な環境の要請で、予測が立とうが立たまいか、何らかの反応を強制されてくる刺激の中で遂行されなければならない場合に、知覚的技能が最大限に活用される ○身体各部の調整力 ○体重・パワー・重心の位置と運動感覚の協応 ○主体と外的事物との時間的・空間的(距離的・高度的・方向的)関係の把握 ○複雑な一連の運動又は、次々と連続して起こる運動の整合 ○失明以前に行っていたような行動形式、ルールなどがそのまま適応される、すなわち視覚なしで失明以前に行っていたことを再び行うことが主なテーマ

2 サッカーとレスリングの部活動指導

筆者は、北海道高等盲学校(現北海道札幌視覚支援学校)勤務時、1981年、北海道高等学校体育連盟にサッカー部の加盟を申請した。しかし、視覚障がい学校を受け入れた前例がなく、ケガなどの懸念があるとし、1年間、検討期間として、札幌南高等学校等との練習試合を通して、判断されることになった。1年後、サッカー専門部の理解を得て、1982年、北海道高等学校体育連盟に加盟することができた。



新聞記事1 1982年 高体連加盟の報道

この当時の高等盲学校の生徒は、生徒個々の視力状況にもよるが、50m 先のボールだけでは

なく、10m 先のボールを目で認知することが難しい生徒もいた。高体連札幌地区予選等の試合は、20 点差以上の得点差で全ての試合で負け、かつ1 点も取ることができなかった。筆者は、生徒の「残念さ」を肌で感じ、高等盲学校の生徒が他の高等学校の生徒と互角に戦うことができるスポーツを探した。丁度そのようなとき、全米アマチュアレスリング大会で視覚障害学生がチャンピオンになったとの記事が、当時の視覚障害専門誌に掲載されていたので、北海道でも可能ではと考え、早速、北海高等学校早坂先生に指導を仰いだ。高等盲学校では午前6 時半から体力トレーニングを行うなど、自校での体力をつけるための徹底的な指導と共に、放課後、北海高校に行って、同校レスリング部と合同練習をするなどを工夫した。このこともあり、翌1983 年度から、北海道高等学校体育連盟アマチュアレスリング専門部加盟校として、高体連レスリング大会に出場することができた。その結果、1983 年度は幾人かが札幌地区予選を突破するだけであったが、1984 年からは札幌地区予選の団体戦でも予選突破し、北海道大会に進めるまでとなった。



新聞記事2 1983年の高体連ベスト8の報道



新聞記事3 1984年国体道予選の報道

弱視を「フォール」



田中良広氏(25)
—レスリング・成年男子フリースタイル57kg級

写真記事4 1984年、国体道予選優
39回わかくさ国体出場、現帝京平成
札幌学校中学部卒業、1984年当時は同校で教諭

田中良広氏は、1983年度の北海道教員採用検査では視力による欠格条項があり、その適用により受検はできなかった。写真記事4は、1983年度、国体道予選で優勝し、当該条項をはねのけ、特別受検して1984年度採用された田中さんの当年度開催の国民体育大会第39回わかくさ国体出場を伝える記事である。

筆者は、視覚障がい特別支援学校の指導実践ではあるが、それを振り返ると、特別支援学校の児童生徒には、一見、容易にできないと思われるスポーツであっても、「閉じた技能」の基礎的・基本的技能を飽くなく回数で、繰り返して習熟度を高めることや、障がいのない生徒に勝利するとの強い精神力を高めることにより、障がいがあっても、同じ年齢の生徒と同じマット上で戦うことができるまで、その生徒の競技力を高めることができるという実践体験である。

このような筆者の体験を踏まえると、特別支援学校が所在する地域で実施される多様なスポーツに生徒が参加することができるよう、特別支援学校は意図的・計画的に指導して、生徒のスポーツの機会をより広げるとともに、生徒の障がいの理解・認識を深めることにも意を尽くすべきではと考えている。

なお、特別支援学校の児童生徒がインクルーシブ型スポーツとして、地域の通常のスポーツの大会等に出場することは、障がい児の理解・認識の推進にもつながる。

IV まとめ

本稿では、特別支援学校の児童生徒が参加することができるスポーツを当該スポーツのルール規制等を基にして、「創意工夫型スポーツ」「特別支援学校型スポーツ」「創意工夫型スポーツ」「パラリンピック型スポーツ」「インクルーシブ型スポーツ」の4カテゴリーに整理(試案)することができた。

また、地域の中で実施される中体連や高体連など、特別支援学校の生徒と同じ年齢の生徒が行うスポーツである「インクルーシブ型スポーツ」について、筆者が行った視覚障がい生徒への「サッカー」と「レスリング」の指導実践を振り返ることができた。

特別支援学校は、児童生徒の個々の障がいの状況や個々のスポーツ・ニーズを的確に把握して、児童生徒が、将来、地域の中で円滑に、かつ健康に生活することができよう、積極的に指導しなければならない。現在、「働き方改革」での教職員の部活動指導や地域の人々に当該部活動等を担ってもらう部活動指導員の導入などの施策が検討されていることを踏まえながら、特別支援学校は児童生徒のスポーツ活動のより一層の充実に向けた取組をすることが求められる。

筆者の法人は、北海道の特別支援学校のスポーツ活動の振興・充実に寄与するため設立された法人である。次のスポーツ基本法前文を胸に納めて、責務を全うするよう努める所存である。

スポーツは、次代を担う青少年の体力を向上させるとともに、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い、実践的な思考力や判断力を育む等人格の形成に大きな影響を及ぼすものである。また、スポーツは、人と人との交流及び地域と地域との交流を促進し、地域の一体感や活力を醸成するものであり、人間関係の希薄化等の問題を抱える地域社会の再生に寄与するものである。さらに、スポーツは、心身の健康の保持増進にも重要な役割を果たすものであり、健康で活力に満ちた長寿社会の実現に不可欠である。

引用・参考文献

- 1) 東京オリンピック 2020 ホームページより引用
<https://tokyo2020.jp/jp/games/sport/paralympic/athletics/>
- 2) 1972 日本ライトハウス「世界盲人百科事典」昭和47年発行版